

視察先別報告 エチオピア

【NGO】

アフリカ理解プロジェクト (CEHP) の活動・製品視察

概要

アフリカへの理解を通じて、グローバルな視野を持つ地球市民を育成することを目標にするNGO。開発教育・グローバル人材の育成、オルタナティブ・トレード、調査・提言、教材開発と情報提供、エチオピアみんなの学校プロジェクトなどを実施している。エチオピアでは有志が集い、エチオピアのハンドメイド製品の品質やパッケージの改善、新商品の開発などで生産者の所得向上を支援する活動CEHP（シェップ）を展開中。

01

井口 久美子 HIV感染者や社会的弱者である女性等の自立支援を目的に集まった有志によるボランティア組織で、資金と時間が掛かるので政府登録NGOにはしていないが、活動は成果を上げている。5年目となる来年に活動終了予定で、終了後もパートナーグループが自分たちで継続していけるよう、現在経過を見守っていると言う。直接雇用はなく、あくまでも生産者と販売者をつなぐ役目に徹し、CEHPは利益を求めない。現在9つのパートナー団体があり、目的に添わないグループは支援を取りやめる場合もあるそうだ。価値観の違うエチオピアで日本受けする商品を作り出し、自立してほしいと願う日本人女性有志により、エチオピア女性の所得が向上した成功例である。プロジェクト終了後も何とか各グループで継続し、広げてほしいと願わずにはられない。

02

板野 光司 CEHPは青年海外協力隊や駐在員の夫人の方々を中心となって、エチオピアの生産業者と販売者の仲介のボランティアをしている。このプロジェクトの期間は2010年から2015年までの5年間。9つあるパートナー団体の内、メリーズという団体では、数人のHIV感染女性がアクセサリーを作り生計を立てられるようにするプロジェクトを行っている。彼女たちは編み物をする日本人が驚くほど上手であるが、ハサミを使うことには慣れておらずまっすぐ切ることができなかったということである。HIV感染女性を貧困から救う上でのモデルとなりえた点で評価できると思った。作り手と買い手の両方にやさしい製品の開発を目指すという方向性に共感が持てた。

03

今村 健司 青年海外協力隊の有志が集まり行われている期間限定のプロジェクト活動である。本来の業務をこなしつつ、ひとりひとりが有機的かつ献身的に活動を行っていた。日本という信頼ブランドを活用して、エチオピアの生産団体を先進国や裕福層へ紹介し、斬新なデザインとアイデアで商品を提案する企画力の高さを感じた。例えばMUYAの手織リョールの説明コピーがいい。「企業名はタレントの意味、フランスやアメリカにも輸出しており、エチオピア人のファッションモデルが立ち上げたブランドも生産」とある。飢餓や貧困といった古いエチオピアのイメージを一新させる、素晴らしい説明だと思う。やがて大きな成長を遂げていくエチオピアの姿を想像する。我々の子供が大人になったときに、彼らとの間に深い信頼関係が結ばれ、共に成長できる同志になれるよう、私も今から出来ることから努力したい、と感じた。

04

久保 雅義 CEHPは、経済的に困窮状態にある人々に、地元素材を使って商品として販売できるレベルのハンドクラフト製作技術を伝え、さらに販売までの流れを仲介する役割をはたしている。他に収入の道を持たない人々の生活を助けるだけでなく「自立」への道筋をつける大きな貢献をしているこのグループが、数名の有志と青年海外協力隊のボランティアで主に構成されていることは驚きだった。「自立への道筋」をつけたあと、その道筋をこれから誰がどのように歩いていくかはエチオピアの人々にまかされるべきだ、というグループのポリシーに基づき、この活動は成功したからこそ、もうすぐ終了を迎える。「与える」支援を超えた「自立」への支援のショーケースだといえる。

05

進藤 千枝 その国の「一人一人の自立」がNGO活動の醍醐味であろう。女性への援助は、自立につながる。自分たちの製品が販売され生き甲斐を感じるということが生活の向上につながっていくことに意識が向いてきていることは、成果の一つであると思った。貧困は、連鎖する。その連鎖を断ち切るためにも経済面での自立がどの国でも重要だと思った。CEHPの活動が、フェイドアウトしても、物を作り販売する活動が地域で根付いてくれる事を願っている。自分たちの手で生活の質が向上し、国の未来につながって行くことを多くのエチオピアの人々に知ってもらいたいと感じた。

06

塚田 好美

CEHPIは、2010年6月にエチオピア在住の日本人有志が始めた活動であり、「なんでもまずはやってみる」精神で、すぐに実行されているところに感銘を受けた。強い理念、明確な目的意識がメンバーひとりひとりにあり、柔軟な体制だったからこそ参加者や協力者が多くなったのだろう。また、これまでの活動を聞き、「自分にはなにができるだろう」と皆が考えたのではないだろうか。2015年で活動は終わり、現地の人に継承していくということであったが、これまでの期間、人と人とがつかないで、エチオピアと日本の関係は強固なものだと思う。日本から外国へ出た人々が、形式にとらわれず活動し、人と人との関係を構築していく。これは地道で長期的な活動が必要であるが、とても大切な国際協力の形だと思う。

07

富田 すみれ子

ODAとは直接関わりのない視察先であったが、私が最も心を動かされたのがCEHPであった。JICA職員の同伴家族や青年海外協力隊員など立場や与えられた役割を超えた様々な人達の活動であったからだ。純粋に「アフリカ・エチオピア国内の貧困・HIV等の社会問題に取り組みたい」「日本でのアフリカという国のイメージを変えたい」という真っすぐな思いが伝わって来た。数年にわたる長期プロジェクトで、大幅な売り上げアップや持続的な経営の基盤が出来上がった事が視察から感じられた。しかし最も重要になってくるのがプロジェクト期間を2015年3月に終了した後のパートナー団体の今後だ。アフリカ理解プロジェクトには是非、数年後のパートナー団体のレポートを期待したい。

08

中村 明夫

CEHPIは貧困削減コミュニティ支援活動を通じ、社会的弱者のサポートや自立を目指すということであるが、この活動に携わっている若い日本人メンバーの皆さん自身の成長にも資する活動になっているとお見受けした。無理をしている風でもなく、自然体で活動されている印象である。NGOとしての在り方のお手本を見た気がした。青年海外協力隊の隊員も複数、ボランティアで参加していたが、この経験を本来の隊員活動にも確り活かしてほしい。CEHPの活動はあと1年で区切りをつけるという点も、活動にメリハリをつけるという点で好感が持てた。

09

橋本 佳澄

CEHPの支援で作られている製品は全体的にファッショナブルな印象だった。日本人には、好まれると思うが、もっとエチオピアの伝統色を強く押し出しても良いかもしれない。後日、市場に行って観察すると「清潔で」「綺麗な」お土産が少ないことに気づく。CEHPは店舗も商品のラッピングも美しく、そこから品質への信頼感が生まれていると感じる。CEHPの商品と似たショールを市場で見たが購買欲は湧かなかった。虫や雑菌などのリスクを回避するため、直接身につけるものは安心できるものを買いたい。海外からの観光客は特にそう強く思うだろう。また、CEHPへの支援が間もなく終わると聞き、エチオピア人だけで運営させて大丈夫なのだろうかとその後のことが気になった。

10

三谷 剛

エチオピアの貧困層を援助している日本人団体のCEHPへ訪問させて頂きました。物価が安いエチオピアでは小さな投資で作品を作れるため、現地の方に手芸品の作り方を教えて、販売経路を確保するという援助をしています。

作品の一つであるエチオピアのコーヒー豆を利用したストラップに目が留まりました。これは、HIV陽性の女性たちが任意で集まり作っており、そして、少ない収益の一部を東日本大震災の援助として、エチオピアから日本へ寄付しています。寄付額としては一つ100円にも満たないのですが、彼女達の心意気と一度も来たことがない日本という国に対する思いやりに感動しました。

11

金子 卓渡

JICAスタッフや随伴家族、青年海外協力隊員等の有志が集い活動を行なっている。NGOとして純粋に現地の人々のためを思い活動する姿勢には感銘を受けた。活動は明確に生産者の所得向上に結びついていた。CEHPパートナーであるHIV陽性者グループMERY'Sを例に挙げると、2年間の活動を通じて、無収入だったのが、安定して月額500ブル（日本円＝約100円）の収入を得られるようになったという。生産者たちの意欲も向上しているとのことだ。日本人が指導を行うことで、繊細な色遣いや、ラッピングの丁寧さ、また、外国人であること自体がブランドといった点で競争力が生まれているようだ。残り約1年で手を引く予定だが、パートナーたちが自立し品質管理を行なっていけるのが課題だろう。